

## 『みだれ髪』論

岡 部 舞

はじめに

歌集『みだれ髪』は明治三十四年八月十五日に東京新詩社、伊藤文友館より発行された与謝野晶子の処女歌集である。「臙脂紫」「蓮の花船」「白百合」「はたち妻」「舞姫」「春思」の六章から成り、三九九首を収録している。

与謝野晶子（本名、鳳志よう）は明治十一年十二月七日、堺市の和菓子商駿河屋に生まれた。父宗七、母津杯の三女である。堺女学校に通い、学校の合間には家業の帳場を手伝っていた。十一歳の頃から「源氏物語」などの古典を独学で勉強し、さまざまな小説に親しむようになる。女学校では裁縫の勉強がほとんどであったため、独学で勉強することが文学に対する晶子の知的な欲求を満たすのに残された唯一の道であった。中流の商家として経済的に安定した生活を送っていたが、受けた教育は兄の東大進学と大きく異なっていた。晶子のはのちに女性の社会参画についての活動に参加しているが、その考えの根底にはこのような自身の生い立ちも関係しているのではないかと考えられる。文学に関心があった晶子は堺市の文学に熱心な青年たちの集まる浪華青年文学会に参加し、その後、与謝野鉄幹の創設した東京新詩社の機関誌『明星』への寄稿などを行い、徐々に文学的地位を高めていくこととなる。また晶子の文筆活動は短歌だけでなく、十八歳からの約四十年間に小説・戯曲・童話・評論・随筆・古典研究・古典現代語訳など多面的な領域に及んでいる。そのなかでも、歌集『みだれ髪』は歌人、与謝野晶子の名を世に広く知らしめた代表作である。

歌集『みだれ髪』収録の歌は明治三十三年四月から明治三十四年八月までの約一年四カ月間に制作された。その作品の多くに、与謝野鉄幹との切実な恋愛体験が含まれている。

与謝野鉄幹（本名、寛）は明治六年に西本願寺派の僧である礼厳の第四子として京都で生まれた。鉄幹は幼いころから鹿児島や大阪、岡山、徳山など家庭の貧困等の理由で各地を転々としていた。鉄幹は小学校時代から主席となるほど優秀で、早くから漢詩や和歌にも興味をもち創作も行っていた。徳山時代には徳山女学校の国漢教師となる。この徳山時代に鉄幹は後に妻となる信子（注三）と滝野に出会う。信子は鉄幹の一番目の妻であり、滝野は二番目の妻とされている。後に晶子は鉄幹と結婚するが、晶子は、三番目の妻ということなる。

鉄幹は明治二十五年に上京し、落合直文門下に入り翌年に創設された浅香社同人として活躍した。その後、短歌改革を目指し、明治二十九年七月には第一詩歌集『東西南北』、明治三十年一月には第二詩歌集『天地玄黄』を相次いで発表した。明治三十二年には東京新詩社を創設し、翌年四月に機関誌『明星』を創刊、主宰した。（注四）

鉄幹との出会いは晶子の恋愛観を構築し、さらに歌人としての与謝野晶子を生み出した。晶子の歌に鉄幹は才能を感じ、『明星』へと引きいれようとした。その後、晶子は文通していた堺の歌人高野鉄南を通して『明星』への寄稿を始め、鉄幹との交流が始まる。そしてついに明治三十三年八月四日に鉄幹と初対面を果たす。晶子は鉄幹の京阪滞在中に数回会い、鉄幹の恋の虜となった。歌集『みだれ髪』に収められている作品も、この出会いの時期をきっかけに、恋に恋し、空想歌ばかりが目立っていた歌風から特定の人物に恋する歌に変化している。このような変化がとも興味深い。晶子は自分の歌の制作について「私の歌は専ら私の実感の表現（注五）です」と述べている。また初期の歌については「幼稚な歌」とも振り返っているが、そこには何の偽りもなくただ当時の自分の生活の内外の実感が歌われているとも断言している。晶子の歌の一首一首に当時の生活の実感が描かれているのである。歌集『みだれ髪』に収められている歌を読み解くことで、当時の晶子の実感を読み解くことができる。また作品に鉄幹との恋愛がどのように影響しているのかを考察することができる。ここでは、鉄幹との出来事を中心に歌風の大きく変化する箇所を以下の三つの時期に分類して考える。（注四）

- A 明治三十三年四月から明治三十三年八月初出
- B 明治三十三年九月から明治三十四年一月初出
- C 明治三十四年二月から明治三十四年八月初出

実際の恋愛史で考えると、Aは明治三十三年七月までの鉄幹との初対面以前である。Bは明治三十三年八月から明治三十三年十二月までの鉄幹との邂逅から再遊の前までであり、Cは明治三十四年一月から明治三十四年七月までの京都での鉄幹との再遊から上京後までである。初出年月と恋愛史に多少のずれが生じているが、これは歌の制作期と発表の時期が異なるためである。

初対面で鉄幹の恋の虜となつた晶子は、恋することの素晴らしさと苦しさを経験する。その実感が晶子の歌の中に表現されている。鉄幹との対面により晶子は従来の情趣的な空想の歌から大きく一歩踏み出し、大胆奔放な発想の歌へと大きく変化する。鉄幹という特定の恋の対象を得たことが晶子の恋愛観だけでなく、その歌風までも変える大きな転換点となつた。初対面後も晶子は鉄幹と再会を繰り返し、自由な恋愛が認められていなかった当時の風潮の中、悩み苦しみながら鉄幹への想いを強くしていく。晶子の恋の苦しみの原因として鉄幹の多情な性格も挙げられるだろう。晶子にとって恋は生活の中心であつたのと同様に鉄幹もまたそうだったのでないか。晶子以外の女性数名とも何らかの関わりがあつたようだ。

そのような鉄幹と、恋愛をしていた晶子であるが、明治三十四年一月の再遊の際に鉄幹との恋愛の成就を感じる。その再会を「再遊」と呼ぶ。本稿で論じる部分はその「再遊」からである。「再遊」から晶子の上京までに晶子の心境にどのような変化があつたのかについて、歌集『みだれ髪』所収の歌を中心に明らかにしていきたい。

本稿では、はじめに分類したCの時期の歌から晶子の実際の恋愛との関係と当時の晶子の心情について考察する。初出年月は明治三十四年二月から明治三十四年八月（歌集初出）であり、実際の恋愛史においては明治三十四年一月から

『みだれ髪』の発表までの時期である。さらに歌と恋愛に影響した出来事を中心に次の三つの章に分けて考察していく。

- 一 栗田山での再遊
- 二 再遊後から晶子上京以前
- 三 上京後から歌集『みだれ髪』発表まで

### 一 栗田山での再遊 —嬉しさと安心感

明治三十四年一月九日、前年十一月に山川登美子も含めた三人で一泊した辻野旅館に、鉄幹と晶子は二人で二泊の宿泊をした。

山川登美子は、明治十二年七月十九日に小浜の国立第二十五銀行頭取山川貞蔵の四女として生まれた。年齢でいうと晶子の一つ年下である。晶子と出会ったのは明治三十三年八月四日、つまり晶子が鉄幹と初対面を果たした時である。鉄幹が登美子に晶子を紹介したという説もあるが詳細については不明である。しかしこの対面をきっかけに登美子と晶子の関係は急速に発展する。晶子と登美子の出会いのきっかけになったのは言うまでもなく鉄幹であり、彼が主催する新詩社とその機関誌『明星』である。二人は出会う以前から『明星』にそれぞれ歌を発表していて、直接的な対面はなかったものの作品を通して間接的に知り合っていたといつてよいだろう。晶子と登美子は文学運動と近代浪漫文学との根底となっている近代人間解放思想に魅力を感じ、このことに当初よりその中心的人物として参画し、明治の新しい女としての生涯を生き抜いたのである。登美子は文学においても活躍しているが、ここでは晶子とともに鉄幹に恋していたという点で重要である。晶子と登美子は互いの気持ちを知りながら（二人の恋人）という形で鉄幹との交流を行っていた。この二人の恋愛が変化したのは、登美子の結婚によってである。当時の結婚は両親が決めた相手とするものであった。そのため登美子は父親の決めた相手と結婚せざるをえなかった。晶子は当時のこのような封建的な古い習わし

をひどく疎んでいたため、登美子のこの悲運に対してひどく同情し、さらに自身はそうはならないという思いを強くしたのではないかと考えられる。登美子の結婚により三者の關係が変化する。

登美子の結婚直後に行われたのが「再遊」である。この宿泊は婚前に起きた出来事だったため不純な行爲として取り上げられることもあり、そのため与謝野側の人たちは、宿泊はなかったと否定することもしばしばあったようだ。今日では研究が進むと共にこの二泊は「決定的事実として『みだれ髪』成立の基礎的な認識（注）になっていく」。それまで鉄幹と晶子が会うときには登美子を含めた三人や他の詩人たちなどが一緒に二人きりで会うということはなかったと思われる。二人きりの上に、さらに二泊の宿泊までするということは恋の成就を感じさせる以外に何があるだろうか。その後、晶子の作品にはこの二泊を回想する歌がいくつか詠まれているが、その中にも恋愛成就を感じさせる歌がある。この再遊はこれまでの鉄幹と晶子の恋愛が前進した出来事といえるだろう。

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひのそれは果してし今

『明星』明三十四・三

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつまじき

『明星』明三十四・三

前首には命をかけて恋愛の成就を祈ったことに対して願いが叶えられた今、「神様はお前の命が惜しいといつて許してくださった（注）」。という恋愛成就の願いが叶えられたことが示されている。また後首には「鶯の鳴く京の山を、落ち椿を踏みながら散歩する仲むつまじげな男女の姿」が描かれている。これまでの鉄幹に対する熱い情熱が描かれていた歌に比べると、穏やかな落ち着いた印象を感じる。鉄幹の多情な性格がゆえ、多くの女性が鉄幹の周囲を取り巻き、叶うかもわからぬ状況で鉄幹への想いを抱いていた晶子は、この恋愛の行末に常に不安を感じていたであろう。そのような状況であった晶子にとってこの再遊は恋愛の成就により喜びを感じさせただけでなく「安心感」をも感じさせたものでは

ないか。

悔いますなおさえし袖に折れし剣つひの理想の花に刺あらじ

『明星』明三十四・三

ここには鉄幹が晶子との恋愛により「紫の鉄幹」に変貌したことを示し、またそのことに後悔せずに「つひの理想」つまり「恋愛の成就と詩歌革新の成功」に向けて一緒に進んでいこうという思いが込められている。

鉄幹は明治三十四年四月に新詩社より第四詩歌集『紫』を出版した。それまでの鉄幹はますらをぶりを提唱することで詩歌革新を進めてきた。その勇猛果敢な鉄幹の姿が〈虎〉のイメージと重なり〈虎の鉄幹〉と呼ばれるようになる。第一詩歌集『東西南北』で〈虎〉の歌が多く詠われているということも〈虎の鉄幹〉と呼ばれる所以にもなったであろう。しかし「第四詩歌集『紫』では、悲憤慷慨の〈虎の鉄幹〉から、いわゆる「紫の鉄幹」に脱皮している<sup>(注九)</sup>。この変化は「晶子との恋愛によって完璧に本格的な恋歌、つまり手弱女ぶりに移行した<sup>(注一〇)</sup>」ことを示している。晶子にとって鉄幹との出会いが大きく影響したように、鉄幹にとっても晶子との出会い、そして恋愛が大きく影響していることがわかる。また、この詩歌集『紫』は『みだれ髪』出版の四か月前に出版されたものであるが『みだれ髪』の歌と対応する歌が多く、『みだれ髪』研究に欠かせない資料<sup>(注一一)</sup>でもある。『紫』には次のような歌がある。

恋といふも未だつくさず人と我とあたらしくしぬ日の本の歌

『小天地』明三十四・二

この歌には「晶子との恋は、単なる恋ではなく、その新しい恋の歌で、国歌の革新をさえ成就しえたのだ<sup>(注一二)</sup>」ということが示されていて、「恋と芸術の双方の達成を自負する歌」とも言われる。鉄幹も晶子との恋の成就を示す歌を詠って

いる。前に挙げた晶子の歌と比べてみても、二人がともに同じ方向に進んでいこうとする、深いつながりを感じることができている。鉄幹の目指す詩歌革新を応援し、さらに支え一緒に歩いていこうとする晶子の女性らしさをも感じることができる。

晶子にとつて鉄幹との恋愛が、想い続けるという形から前進し、ともに同じ目標に向かって歩んでいこうとする現実的なものになったことは大きな変化である。これにより晶子の心に僅かではあるが余裕が生まれ〈安心感〉を感じさせた。た。た。た。このことは前出した一緒に並んで歩くということに喜びを感じているという「鶯に…」の歌からも感じることができるとはではないか。

以上のことから、栗田山での再遊が鉄幹と晶子の恋愛を前進させ、大きな変化をもたらした出来事であることがわかる。しかし、この再遊によって感じた晶子の〈安心感〉は、次第に〈不安〉と〈嫉妬〉という感情に変わっていく。

## 二 再遊後から晶子の上京以前 — 不安と嫉妬

ここでは、明治三十四年一月十一日（再遊のとき）に別れてから晶子が鉄幹のもとに上京する明治三十四年六月までの間に発表された歌から、心情の変化を見ていく。前節で取り上げた歌と初出年月が重なる場合があるが、前節で扱った歌は、再遊のときの回想など歌の背景に再遊の出来事が考えられるものであり、今回扱う歌はそれとは別であるということを述べておく。

さて、晶子は再遊によって、鉄幹とのそれまでの叶うことも分からぬ〈不安〉な恋から前進し、喜びと〈安心感〉を感じたわけであるが、その気持ちの余裕はすぐに〈不安〉と〈嫉妬〉に変化してしまう。

鉄幹には晶子との結婚の前に解決しなければいけない問題が多く存在していた。

第一に解決しなければいけない問題は第二妻であつた滝野との関係である。鉄幹は明治三十三年十月の来阪の際に、すでに滝野の父小太郎に鉄幹が林家に養子として入るのが了承できないのであれば、滝野と離縁するようにと決断を迫

られていた。滝野にとつての離婚の原因は鉄幹の多情な性格などの「性格的な不一致」<sup>(注二)</sup>があつたためとしてゐる。この鉄幹の多情な性格は晶子に〈不安〉や〈嫉妬〉を感じさせる要因ともなる。また、滝野との離縁は機関紙『明星』の発行にも大きくかわつてゐる。『明星』の発行は林家の支援があつたからこそ成し得ていたものであつた。そのため林家の援助がなくなることは『明星』刊行ができなくなつてしまふ恐れがあつたため、鉄幹を悩ませたと考えられる。鉄幹と滝野については後述する。

第二の問題は機関紙『明星』をめぐる起つた『明星』八号発禁事件と『文壇照魔鏡』問題などの新詩社のさまざま  
まな問題である。

『明星』八号の発禁事件の原因になつたのは、画家である一條成美が『明星』八号に載せたフランスの裸体画二葉の模写である。この裸体画が「道徳上、風俗壊乱をきたす」ということで内務大臣から発禁させられたのである。<sup>(注四)</sup>

『文壇照魔鏡』は明治三十四年三月十日に刊行された。著作者や発行者はすべて架空の名前であり、鉄幹を批判する怪文書である。鉄幹をはじめのうちはこのことに関して消極的であえて問題にしないという姿勢でいたが、この『文壇照魔鏡』による影響は甚だ大きく、鉄幹を苦しめた。後に誹毀罪（現在の名誉毀損罪）として司法処分を要求する。<sup>(注一)</sup>『文壇照魔鏡』発表直後、明治三十四年三月二十九日の晶子宛て書簡で鉄幹は「必ず曲直八其内に判明すべく候」と述べつつ「小生の為にかの魔書の著者を懲らさんとする気ばやの青年の多きに、その鎮撫方にこまり候」と自身の味方が居ることに嬉しさを感じていた。しかしその一方で、「新き友人のなかにてかの書中の幾分を信ずる者ある八困り候。されど今八弁疏致さず。嘲罵の下に倒るゝか、倒れぬか、ためしたく候。」と緊迫した心境も述べてゐる。<sup>(注一六)</sup>

この『明星』八号（明三十三・十一）発禁事件と『文壇照魔鏡』の問題により、『明星』は二月、四月、六月を休刊することになり『明星』の刊行に大きな影響を与えた。休刊に伴い読者の数も徐々に減少し、新詩社は苦境に陥つた。短歌革新を起そうとする鉄幹に対して、また新詩社の発展を妬んだ者により起されたものが、この二つの事件であつた。そのような状況の中、鉄幹が自身の信念を貫き、突き進むことができたのには、同じ目標に向かう新詩社の同人たち、そして何より晶子の存在が大きかつたのではないか。



幸おはせ羽やはらかき鳩とらへ罪た。だしたる高き君たち

『明星』明三十四・五

打ちますにしろがねの鞭うつくしき愚かよ泣くか名にうとき羊

同右

この二首は『文壇照魔鏡』に関連した晶子の歌である。前首は事件の当事者に向けた抗議の歌である。「羽やはらかき鳩」は「他人の迫害に抵抗することもできない弱者」という比喻で鉄幹を指している。「さまざまな罪名を着せて指弾する徳行高き人たちに幸いあれ」という事件の当事者への皮肉な反語表現である。後首は「世の中の評判に無関心な詩人が、さまざまな美名に隠された人身攻撃に会い、愚かにも泣いていることだ」と事件にうちのめされている鉄幹への同情が詠われている。自身へ浴びせられる批判の言葉に悩み苦しんでいた鉄幹であったが、晶子のこの歌などによって心を強くしたのだろう。

滝野とは明治三十四年の春ごろ滝野が実家に帰り、その後離縁する流れとなった。鉄幹は滝野の帰郷の後、「滝野が再び上京しないと思いこみ、晶子の上京を（四月末）としていた」<sup>（注一七）</sup>。そのことがわかる晶子宛ての鉄幹の書簡（明治三十四年三月二十九日）がある。「あひたく候。四月の末とは遠きことに候かな。」この上京の計画は「栗田山再会の折に鉄幹と成されたものと思われ」<sup>（注一八）</sup>と逸見氏は述べている。しかし当初のこの予定も、四月に鉄幹に送られてきた滝野からの上京を知らせる手紙によって二ヶ月ほど先延ばしとなる。再遊後から念願にしていた上京を先延ばしになった晶子はとても落胆したことであろう。このことが晶子の〈不安〉をより助長させたのではないか。

次の歌は上京を考えて詠われたと思われる歌である。恋の成就を待っているという晶子の健気な姿が浮かぶ。

山ごもりかくてあはれなのみをしへよ紅つくるころ桃の花さかむ

上の句は「今のままで時節の到来を待てという恋人の言葉」であり、下の句では恋人の言葉を「信じて紅を使い尽くすころには、桃の花も咲きわが恋のなる日が来るだろう」というように解釈できる。この歌に関して再遊の時の様子詠ったものであるという意見と、上京を心待ちにしているものであるという意見があるが、これに関しては初出の時期などから考えても後者の意見が適当なのではないかと考える。

滝野と晶子には手紙のやり取りがあった。晶子宛ての滝野の書簡がないため滝野宛ての晶子書簡から推察するほかに、その書簡から感じるのは晶子の滝野への気遣いである。次の文書は明治三十四年三月十三日の滝野宛て晶子の書簡である。<sup>(註九)</sup>

うれしく候 ミ情うれしく候 君すゐし給へ みたりこゝちの有に候 やさしの姉君は、そはすゐし給ふべく、かゝるかなしきことになりてきこえかはしまゐらすちきりとはおもはず候に人並ならぬつたなき手もつ子それひたすらはずかしくおもひながら いつかはのとかにかきかはしまゐらすことゆるし給ふ世あるべくたのミ候ひしおもひ候ひし おのれか奇矯を売らむとてのうた その為に師なる君にあらぬまかつミかけまゐらせしこの子に くゝこらし給ハぬがくるしく候

この後はたゞ ひろきこゝろをのミたのミまゐらすべく候 ゆるさせ給ふべくや つミの子この子かなしく候  
御なつかしく候 やさしのミ文涙せきあへず候ひし  
けふまことそゞろがきゆるし給へ 何も ゆるし給へ

御返しまで参候

この夕

晶子

姉君のミ前に

これは滝野からの書簡の返事を書いたものと思われる。逸見氏は晶子宛ての滝野の書簡には「滝野が鉄幹との離別の意志を伝え、晶子に一任したい思いを洩らした」<sup>(注二〇)</sup>内容が書かれていたと推察している。また、滝野を〈師なる君〉と言い、「迷惑をかけたことに自責の念を抱き、自分を責めない滝野に対して心苦しく思つて許しを乞ひ、滝野の優しさに感涙している」<sup>(注二一)</sup>とも述べている。鉄幹に対して情熱的な歌を詠っている晶子の書簡だとは思えない、妻であった滝野に對して引け目を感じている、また氣遣つていような書簡である。この頃から〈嫉妬〉の歌が多くなつていくが、滝野に對して詠つたものが少ないということも興味深い。

上京の予定が先延ばしになり、恋の成就を感じた再遊のときから半年たつたころの上京に至るまで、晶子の心は不安定なものになつていた。この時期に詠われた歌の中には失恋の歌もある。

紫の理想の雲はちぎれくく仰ぐわが空それはた消えぬ

『明星』明三十四・三

ここで紫の雲は「恋の理想の雲」である。「仰ぐ天上にちぎれちぎれながらも紫の雲が飛んでいたのに、それさえも今はすっかり消えてしまつた」と失恋の絶望を読んでいる。恋の成就の歌もあれば、失恋の歌もあり晶子がいかに悩み苦しんでいたのがわかる。

晶子の苦悩は、この時期の河井醉茗宛て晶子の書簡からも感じることができる。河井醉茗は大阪府堺市の生まれで『よしあし草』の編集を担当するなど、晶子との関わりが深かつた人物である。明治三十四年三月十九日の書簡には「ものくるほしの今」、同年三月二十二日の書簡には「もだえの子」とも書いている。苦しさを訴える内容の書簡はこの時期多く確認できる。次の書簡は明治三十四年三月二十二日に送られたものである。この書簡は特に自身の精神状況の不安定さを訴えているものとして印象的である。

私世の声 人の声に一日はつよく一日はよはく毎日もだえ居るのに候 もう何もおもふまじと今は二三日おもひおりしに候 されどまたよはくなるべくまことわれくるしく候

周囲の噂に一喜一憂し苦悩している様子がわかる。的確に自身の心の不安定さを訴えている。一方で明るい歌も詠われている。

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす

『明星』明三十四・五

〈島田〉とは「島田まげ」のことで婚礼のときの結髪のことである。ここには「結い上げた島田まげをみせたいという女心の機微と、新妻気取りのはしゃいだ姿態」を描いている。鉄幹との結婚に心弾ませている様子がわかる。

ここまで晶子の〈不安〉な心境についてみてきたが、ここからは〈嫉妬〉を中心にみていく。

前章で述べたが鉄幹は多情な性格をもつ男であった。そんな鉄幹であったために再遊までの晶子の恋愛は常に〈不安〉が付きままとっていたが、再遊後（恋愛の成就を感じた後）にはその不安な気持ちから〈嫉妬〉という気持ちがより強くなっていく。

晶子の〈嫉妬〉の対象は山川登美子を中心だった。前述しているが、滝野に対する〈嫉妬〉の歌は極端に少ない。晶子にとって滝野は鉄幹の前妻であり、書簡で「姉君」とも慕っていた。また、経済的な面においても、機関誌『明星』刊行のための援助をしていた存在であったため〈嫉妬〉の対象にするわけにはいかなかったのかもしれない。次の一首は数少ない滝野への嫉妬の歌と言われるものである。

人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌か芙蓉といふ文字

『明星』明三十四・三

「恋人がそわそわして落ち着かない様子で、羽織の肩裏に歌らしいものを書いたが、その中に芙蓉という文字が目についた。さてはその名をもつ人を忘れられない」のだな、という内容の歌である。《芙蓉》は滝野を示す花の名前である。この歌に関しては「滝野に対する嫉妬の感情をやや控えめな形でうち出した」ものであるとも述べられている。ここにも滝野に対する気遣いの気持ちゆえ、遠慮して詠っているような印象をうける。

実際、鉄幹は滝野との離縁後も頻繁に書簡を出している。内容も「いつ〜までもこの恋しきなかはかはり玉はぬやう」<sup>(註三)</sup>など滝野の気を引くようなことも書かれている。鉄幹は離縁後も滝野への気持ちは変わらぬものがあつたのだろう。しかし、鉄幹が多情な性格と知りつつもその書簡の内容には驚かされる内容もあつた。次の書簡は滝野宛てに書かれた鉄幹の書簡である。明治三十四年四月十三日のものである。

鳳も山川も和久も増田もわれの恋人に相違なく候 鳳は尤もあつき恋人に候 (略) かならず候 君よ 鳳女史  
をまことの妹とも思ひ玉へ 何卒かの人々と我と恋することも許し玉ふべし われは猶この外にも恋を作り候べし  
されど 妻とせん人はいまだ定めをらず候

この書簡の第一印象は、なんとという告白であろうかという驚きである。離縁した相手とはいえ、とても大胆な告白であり、正直多情な性格のいき過ぎた表現、常軌を逸した告白とも感じた。さらにここに書かれているように妻はまだ定めていないともある。この書簡は明治三十四年四月に書かれたものであるが、この時にはすでに晶子の上京は決定していたはずである。滝野の気を引くために妻は作らないというような書き方になつたのかもしれないが、晶子のうきうきとした健気な姿を思うと心が痛むような内容である。晶子にとってはなんと不憫なことであろうか。鉄幹の多情な性格

がゆえに、恋の成就を感じつつも〈不安〉や〈嫉妬〉に苦悩したのがよく理解できる。

手をひたし水は昔にかはらずとさけぶ子の恋われあやぶみぬ

『明星』明三十四・三

ここには「恋の前途が不安」だということが詠われている。まさに鉄幹の自由奔放な姿に不安を抱いたのではないか。滝野への控えめな嫉妬の歌を詠った晶子であるが、登美子に対してははっきりとした〈嫉妬〉の感情が読み取れる。登美子は互いに共通の恋人というような認識で鉄幹に恋していた妹であったが、故郷で父の勧めにより意に沿わない結婚をし、晶子は鉄幹との恋を成就させた。しかし、その後も鉄幹は登美子に対する詩を詠い、そのような状況において、晶子にとつて登美子は〈嫉妬〉の対象として確立していったのではないか。

恨みまつる湯におりしまの一人居を歌なかりきの君へだてあり

『新潮』明三十四・四

秋の袞あしたわびし身うらめしきつめたきためし春の京に得ぬ

同右

秋を人のよりし柱にとがめあり梅にことかるきぬぎぬの歌

同右

一首目は「入浴中に何も歌を作らなかつたと言われるが、そんな隠しだてをなさるあなたが恨めしい。(略)登美子をしのぶ歌でも作ったのではないか」と邪推した歌であり、二首目は「春の京都で、今度は友の悲しい境遇をわが身に感じ、去年の秋友に同情したことまでが恨めしい。」という内容で「登美子を忘れ得ぬ恋人の様子に不満な心情を屈折

させた表現」がされている。三首目には「恋人が朝、私にくれた歌は季節の梅に言寄せてはいるが、白百合の君をしのんでの作に違いない。そうさせた罪は去年の秋白百合の君がよりかかったその柱にあるのだ」という内容が描かれている。鉄幹に対しての不満からくる登美子への嫉妬の歌ともいえる。

この三首が発表された明治三十四年四月の歌は集中に五首のみであるが、うち登美子に関する歌は四首である。今回はその中の嫉妬につながる歌を三首挙げた。晶子の嫉妬心は登美子ひとりに向けられたものではなく、他の女性にも向けられている。この嫉妬の苦しみはまさしく鉄幹の多情な性格のためである。

再遊後から上京までの約六カ月間の晶子の心情は、恋の成り行きに対する〈不安〉、さらには多情な性格の恋人ゆえに起こる多くの女性への〈嫉妬〉の思いでいっぱいであつただろう。実に不安定で、穏やかではない毎日を過ごしながら、晶子は遂に上京の日を迎える。

### 三 上京後から歌集『みだれ髪』発表まで ―喜びと回想

粟田山での再遊後から約六カ月後、晶子は遂に鉄幹のもとへと上京する。明治三十四年六月十四日のことである。(上京の日については諸説あるが、今回は逸見氏の説による。)

ここからは、上京後の晶子の歌から、晶子の心情と『みだれ髪』発表までの晶子の感じていたことを確認していく。初出年月は明治三十四年七月から歌集初出までである。

晶子の上京は慌ただしく行われた。再遊の際に決められたであろう四月末の上京計画は滝野の上京などの問題により、六月に先延ばしにされていた。心待ちにしていた上京は、滝野の帰郷と入れ替えに行われた。上京についての歌がある。

狂いの子われに焰の翹かるき百三十里あわただしの旅

『みだれ髪』 明三十四・八

晶子が堺の家を捨てて東京の鉄幹のもとへ来た時の実感を讀んだ歌である。《百三十里》は両地間の距離を表している。「恋に狂った自分が情熱の翼を羽ばたき、大空を飛ぶようにして」上京したという上京のときの晶子の思いである。まだか、まだかと心待ちにしていた晶子にとつて、ついに羽ばたく時が来たともいうように、解放感を感じる一首である。この晶子の心情には鉄幹のもとへ行けるという解放感とともに、古い因襲にとらわれた堺の実家から出て自由になるという解放の意味もあつたのではないか。しかし、一方では堺の家を捨てていくということに、心苦しさを感じていたようだ。

いとせめてもゆるがままにもえしめよ斯くぞ覚ゆる暮れて行く春

『明星』 明三十四・七

「暮れゆく春とともに、わが青春の過ぎゆくのもまた早い。あたり青春の過ぎぬ間に、せめてこの情熱をどこまでも燃え上がらせたものだ」ということのなかには、「家や父母を捨ててきた上京後の複雑な心境がのぞかれる」と坂本氏は述べている。鉄幹に恋い焦がれ、自由に羽ばたきたい一方で、堺の家のことを心配に思つてのことであろう。それでも上京したということに、父母には自身の思いをわかつてほしいと訴えているようにも思われる。

上京後の晶子の作品には鉄幹と始める新生活への喜びがはつきりと詠われている。

小傘とりて朝の水くむ我とこそ穂麦あをあを小雨ふる里

『明星』 三十四・七

あづまやに水のおときく藤の夕はづしますなのひくき枕よ

同右



一首目の上の句には雨の中、水を汲みに行く様子があり、下の句にはあおあおとした穂麦に小雨が降りかかっている様子が書かれている。穂麦と自身の姿を対照して、自身の生き生きとした様子を描いているようにも思われる。坂本氏は「上京後の新生活の喜びの情が一首のはずんだ調子によく出ている」と述べている。また二首目には「せせらぐ水の音の聞こえるあずま屋で、咲き誇る藤の花を眺めながら夕暮れのひとときを過ごす恋人同士」の様子が書かれ、そこには「静寂な雰囲気と満ち足りた気分」が感じられる。晶子の心の充実をしっかりと実感できる。上京後の明治三十四年七・八月初出の歌からは晶子の心の充実とさらには恋愛の素晴らしさが伝わってくる。

神ここに力をわびぬとき紅のにほひ興がるめしひの少女

『明星』明三十四・七

みどりなるは学びの宮とさす神にいらへまつらで摘む夕すみれ

同右

かたちの子春の子血の子ほのほの子いまを自在の翹なからずや

同右

一首目は「恋に狂わせないようにと神はこの少女を盲目にしたが、目は見えなくても溶き紅のにおいを慕うように恋にあこがれるので、神はとても力が及ばないと嘆いた」という歌である。「恋の本能の盲目的な強さ」が描かれている。二首目は「はなやかでなくても、堅実な理想の生活に入れという理性のささやき（略）に答えないで夕すみれを摘み続けるのは、恋愛に夢中になっていることを示している」。このことに対しては「理性よりも感情をといて観念的な内容を象徴的に表現」していると坂本氏は述べている。恋愛の強さを示している。三首目には「美貌のおとめ、情熱の炎に身を焼くおとめ、それがこの私にほかならない。今こそ恋の世界を自由に羽ばたこう」という晶子の「解放された自我

の賛歌」が描かれている。

上京によつて「不安」と「嫉妬」ばかりであつた晶子の気持ちは「喜び」に変わる。そして、その「喜び」を感じさせた恋愛の素晴らしさを歌の中でも描いている。

紫のわが世の恋のあさぼらけ諸手のかをり追風ながき

『小天地』明三十四・八

この歌は「双手を上げて走る女神のイメージを仮りて、わが恋愛生活の美しい開幕を誇示した」ものである。「諸手のかをり」には人間性解放の喜びがある。そして「それが永遠に若人のあこがれとなるとの意を、「追風ながき」に形象化した」としている。まさに因襲による古い考えに囚われているのではなく、自己を解放し恋愛の喜びを感じましよう、という晶子の思いなのではないか。

明治三十四年八月以降の歌はすべて歌集が初出のものとなる。これらの歌からはこれまでの鉄幹との恋愛を回想しているような印象を受ける。これまでの楽しかった思い出や、不安や嫉妬に駆られた日々、その一瞬一瞬を思い、その時の気持ちになつて歌を詠む。晶子は自身の歌は「専ら私の実感の表現です。」<sup>(注三)</sup>というように、一瞬一瞬を丁寧に感じ取っていたのではないか。そしてこの感情が忘れ去られぬうちに、今この一瞬の素晴らしさを感じているうちに、この思いを世の中の人々に伝えたい。その一心で歌集『みだれ髪』が成立したのではないか。この時期の歌には鉄幹との恋愛の宣言も描かれているのではないか。

天の才ここにほひの美しき春をゆふべに集ゆるさずや

『みだれ髪』明三十四・八

「天賦の才をもつ者のおい高い美しさは、まさにこのらんまんたる春にふさわしい。その春の過ぎぬうちに歌集を編ませてほしい。(略)『みだれ髪』を編んでいた時の昂然たる心境の表白」である。

### おわりに

歌集『みだれ髪』に収められている晶子の歌を時系列に確認していくことで見えたものは、晶子の実直さと信念の強さである。常に歌には全力でのぞみ、人目をばばかり一瞬一瞬の〈実感〉をそのとき感じたままに表現する。女性の地位も確立されていない当時において、晶子の大胆な感情の発露には批判もあつたであろう。まさに強い信念があつたからこそ成し得たものである。そして、その晶子の才能を見抜き、支え開花させたのは言うまでもなく鉄幹である。晶子が鉄幹を支えたように、鉄幹もまた晶子の心の支えとなっていたのだろう。『みだれ髪』に描かれる鉄幹と晶子の自由な恋愛は、まさに恋愛至上主義の二人によつて描かれた新しい男女のあり方ともいえるのではないか。

自我の解放、女性讚美、恋愛至上主義を強く示した晶子の歌集『みだれ髪』の発表について、赤松氏は次のようにその文学的意義を述べている。(註三)

歌壇はいうにおよばず、文壇をあげて、熱狂の渦を巻きおこした。青春の名にまことにふさわしい力と情熱と明るさにあふれた歌集、はじめてこの国に出現した青春讚歌、いや青春誇示の歌集として、天下の子女を沸かせ、大きな感動を呼び、鯨波のような讚嘆の声を挙げさせたのである。

後年晶子は「歌の作りやう」において『みだれ髪』について次のように述べている。(註四)

其頃の私は唯だ歌ひたいから歌ふと云ふ風で何の反省もせずにあたのですから、自分の歌が何う云ふ質を持ち、

何う云ふ社会的価値を持つて居るかも考えずに居ましたから、今から思ふと、幼稚な歌が多くて赤面する許です。

私はここに最大の意義があるとも思う。青春時代の自身の抑えきれない力は、さまざまな形で表現される。晶子にとつての青春はまさに鉄幹との恋愛であり、その抑えきれない感情は『みだれ髪』の中に表現された。振り返つてみると恥ずかしいような、憎たらしいような何とも言えない気持ちになるものが青春の思い出であり、それこそが青春の証であるとも思う。晶子にとつて赤面するような思い出ということは、そこに描かれるものはまさしく晶子の青春の（実感）だということでもある。その晶子の（実感）を、現在もお私たちが感じることができると歌集『みだれ髪』の最大の価値があると思う。

【注一覽】

注一 以上の与謝野晶子、与謝野鉄幹の概略は次のものから引用した。

逸見久美 『新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇』（八木書店 平十九・八）

注二 与謝野晶子「歌の作りやう」金尾文淵堂 大四・十二（初出）

逸見久美（編集代表）『鉄幹晶子全集15』（勉誠出版 平六・十）（所収）

注三 同右

注四 分類の基準は次のものを参考にした。

逸見久美 『新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇』

注五 以上の概略は次のものから使用した。

西尾能仁 『晶子・登美子・明治の新しい女・愛と文学』（有斐閣 昭六十一・八）

注六 逸見久美 『新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇』

注七 注釈 坂本政親 『日本近代文学大系17与謝野晶子、若山牧水、窪田空穂集』（角川書店 昭四十六・二）

※ 以下、歌集『みだれ髪』所収の歌の注釈は同書による。

注八 注六と同じ。

注九 赤松行雄『決定版 与謝野晶子研究——明治、大正そして昭和へ』（学芸書林 平六・十）

注一〇 注六と同じ。

注一一 新聞進一『日本文学大系55 近代短歌集』（角川書店 昭四十八・九）

注一二 注釈 新聞進一『日本文学大系55 近代短歌集』

※ 以下、詩歌集『紫』所収の歌の注釈は同書による。

注一三 注一一と同じ。

注一四 注六と同じ。

注一五 鉄幹の書簡内容は初出にあたることができなかつたため、次のものから使用した。

逸見久美『新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇』

※ 以下、鉄幹の書籍の引用は同書による。

注一六 事件の概略は次のものから使用した。

逸見久美『新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇』

注一七 注六と同じ。

注一八 同右

注一九 逸見久美（編集）『与謝野寛晶子書簡集成 第一巻』（八木書店 平十四・十）

※ 以下、晶子の書簡の引用は同書による。

注二〇 注六と同じ。

注二一 注一九と同じ。

※ 以下、鉄幹の書簡の引用は同書による。

注二二 注二と同じ。

注二三 注九と同じ。

注二四 注二と同じ。

※ 与謝野晶子の歌のテキストは以下のものを使用した。

注釈者 坂本政親 『日本近代文学大系17 与謝野晶子、若山牧水、窪田空穂集』（角川書店 昭四十六・二）

※ 与謝野鉄幹の歌のテキストは以下のものを使用した。

注釈者 新聞進一 『日本文学大系55 近代短歌集』（角川書店 昭四十八・九）

※ テキスト以外の著作からの引用も原則そのままである。ただし、旧字体は差し支えないと判断して新字体に改め、圈点、振り仮名は省略した。

※ 引用文献の刊期は元号に統一した。